



ご挨拶

水澤雪下ひとり雑誌

雪下

第四十号

2023/11/28 発行

題字：高橋弘美

なんだかんだでこの「雪下」も四十号に到達した。長かったのか短かったのか、よくわからない。三年も毎月こんなことを続けていると、それがもう自分の一部になってしまっているというのがよくわかるが、はじめた当時は必死の試みであったはずのこの雑誌も、いまとなってはその目的がまったく別の方向に向かってしまい、そもそも目的があったのかどうかさえよくわからないようになっている。

過去をふり返るといようなこと、なかんずく、過去の自分の作品を読み返すといようなことがあまり好きではない。自分のどの作品にも愛着を持っているという人も当然いると思うが、わたしはそういうタイプではない。それでもここ一、二年ほどのあいだに書いたものは、何年も経ってから読み返せば、またそれなりに新しい発見があるという種類のもののような気はする。四十年も経って、ようやく自分は真に生きはじめたのではないかといようなことをこの頃ときどき思うが、自分は四十にならねば本物でないということを、中学くらいのときからなぜか思っていた。ずいぶん手間のかかる生き物である。

今号の内容

ある子別れ

ある子別れ

先月、熊出没の衝撃について書いたが、それ以来、幸いなことに熊には出くわさないうですんでいるものの、ムジナに出くわすようになった。茶色いふさふさした体毛と尾っぽをもった、タヌキによく似た生き物である。

このあたりに住む人たちは、なんの気なしにムジナムジナと呼んで、なんとなくタヌキの仲間のように思っているが、タヌキとムジナはまったく別の生き物だそうである。タヌキはイヌ科の動物だが、ムジナはイタチ科に属するアナグマの一種で、ムジナという名は正式の学名にはないという。

昔、しつぽがしましなものがタヌキだという見分け方を誰かから教わった気がするけれども、これはどうやら間違いで、タヌキのしつぽはしましまではない。一瞥しただけでは、両者を区別する特徴らしきものは見当たらないのだが、この見分けの難しさのためか、全国各地で非常に混乱した理解が見られるというので、柳田国男がその名も『狸とムジナ』という随筆を書いている。

北海道に船旅をしていた折、船の中で、柳田は狸とムジナはなにが違うのかと訊ねられた。そこで柳田は自信満々にこう答えた。

「そりや違いますよ。第一に狸は尻尾が太く、ムジナの尻尾は細い。第二には狸の毛は筆になり、ムジナの毛はならない。第三に狸は樹に登ることができないが、ムジナは木のぼりをして、小柿などをよく食うものだ」

このように柳田は、タヌキとムジナがまるで別の生き物であることに確信を持っていたわけだが、その旅から還って来てみると、留守中に『動物文学』という雑誌が届いていて、平岩米吉というこの方面の研究者が、狸とムジナは同じ動物の二つの名だと、明白に断定した一文を掲げていた。

しかし柳田は少しもまごつかない。この問題はもう二十年も前に裁判にまで発展したことがあると彼は述べて、それは「たぬき・むじな事件」なる、一九二四年に起きた事件である。柳田の要約によれば、その顛末は次のようなものだった。

「県令で狸を捕った者は罰するという禁止令が出ているのに、ムジナはよかろうと公然これを打った者が告発せられたのである。川瀬林学博士が鑑定人として控訴審に招かれ、やはり平岩君と同じに、狸猪同一説を主張せられたが、判決は結局無罪であったように記憶する。というわけはこの地方にはタヌキという言葉はなく、狸という文字は

知っていても、それが土地でムジナという獣のことだということを、まだ誰からも教えられていなかったからである。捕殺を禁止しようとするならば、ムジナと訳して書くか、少なくとも狸すなわちここでムジナという獣と、明示する必要があった。それをしなかったのだから落度は立法の方にあったのである」

ここから柳田は、各地方におけるタヌキムジナの混同や一方の呼び名の欠如、マミなる名称まであることなどについてやや詳細に述べたあと、「タヌキは標準語、すなわち動物学でも認められた名であるのみか、用いない土地はあるが知らぬ子供はまずなからうし、その対象も一定しているに反して、ムジナはいわゆる学名でない上に、行く先々で物がちがいがい、折々人をしくじらせるから、これからはあまりはやらせぬようにした方が便利である。しかし親代々そう言っているものを、急にやめさせることもできまいから、もし親切があるならここでいうムジナのことなどと、付け加えるのもよいかと思う。穴熊の方は狸にくらべていつそう普及せずまたたくさんの方名があるから、これすなわち利根郡でササムジというものとか、この辺でマミムジまたはマミというものがそれだと説明すべきであり、ことにこの辺でいうムジナのことだと、言うべき場合が多かろうと思う」と結論づけている。

ところで、柳田がこの随筆を書いてからすでに七十年以上が経過しているが、わたしのほうでは相変わらずムジナはムジナである。タヌキはタヌキでまた別になっていることになっていて、そうひどい混乱は起きていないが、日本全国を見回しても、正式な「アナグマ」なる名称はいっこう定着していないようである。ムジナは相変わらずムジナとして生きており、タヌキとムジナの違いも、人や場所によっては相変わらず不明瞭なままにとどまっていそう。わたしとて、昔誰かに教わらなかったならば、ずんぐりむっくりの犬のような生き物を見て、きっとこれはタヌキだと思ったに違いない。あの人を化かす愉快な、だがなんだか少し気味の悪いやつに出会ってしまったと、つい思いこんだに違いないのである。

話がどうも予定と違う方向へ行ってしまったが、ともかくわたしが最近よく見かけるのはムジナであって、タヌキでないのは確かである。しかもこいつは、わたしの散歩コースにいたのである。

散歩コースは田んぼの中の農道なので、道に沿って用水路が整備されている。ムジナ先生はどうもこの用水路を出たり入ったりして移動しているらしいのだが、去年までは散歩中に野生の生き物など見ることがなかったから、これも熊の大量出没となにか関連があるのだろうか。ちよつとわ

からないが、野生の動物が人の生活圏に出没するというのは、熊の場合と同様、少々異様な出来事なのは確かである。

わたしがムジナに出遭ったのは、例によって午後の散歩の最中だった。小春日和で、わたしは冬が来る前にあと幾日こうした日光に恵まれた、穏やかな日を迎えることができるだろうと思いつながら歩いていた。十一月も半ばで、これから半年近くめつたに拝むことができなくなる太陽を惜しむ気持ちは、日増しに切実なものになりつつあった。人々はほんのわずかな鈍い日差しでも、なにかと用事を作って外へ出た。冬囲いや畑の始末や収穫した野菜を干したりなどして、なにかという日差しのもとにいたがった。まもなくこのぬくもりと暖かな黄色とは、灰色のどんよりした空と雪とにさえぎられて、少しも拝めないようになってしまふ。冬の前の、最後の日の名残を惜しむように、人々は体に日を浴び、わたしも体に日を浴びた。その日は妙に暖かった。春のようなのんびりした、ぼうつとした暖かな気配があたりを満ちている、太陽は青々した空にぼんやりしたように居座っていた。雲はほとんどなかった。快晴といつていい空の下、わたしはいつものように山際を歩いたが、そのときふと、道の脇の草むらをかき分けながら、なにか小さな動物がこちらへちよこちよこ歩いてくるのに気がついた。

そいつはまだ、何十メートルも前方にいた。わたしははじめ、きっと猫だろうと思った。近所の家で飼われている三毛猫か黒猫が、また家を抜け出してあたりをほつつき歩いているのだろうかと思った。この家の猫はわたしが運転しているのに出くわすと、車の少し先をトトトツと走って行ってはふり返って、なにか疑わしげにわたしを見る。車が近くに来るとまたトトトツと少し走って、立ち止まって疑り深い顔つきでこっちを見つめるのである。別にこの猫どもをひき殺しかけたことなどないのだが、連中はわたしの運転技術というものになにか深刻な疑いを抱いており、こんなやつを野放ししておくわけにいかぬという責任でも感じていらしいのである。

わたしとこの猫どもはしかし、それほど親しい関係ではなかった。猫はそもそも、誰とも親しくなどならないものだ。猫の自意識は人の自意識と衝突するたぐいのものである。猫の本性がそうなのだから、こんな生き物を飼う人の気持ちを知れないのだが、ともかくわたしは、向こうからやってくるのはこの猫だろうと思った。それで気楽にぶらぶら歩いて行った。ところが、もう少し互いに歩み寄ってみると、どうも猫にしては少し大きいようなのである。

その黒っぽい生き物は、地面に鼻をこすりつけるようにして嗅ぎまわりながら、とことこ歩いて

くる。さては犬だろうか。幼なじみのSの家には年老いた黒犬がいる。白毛まじりの、十三歳だかになるメスの雑種で、もう年金暮らしどころでないといとSの父親が云っていた。おれもあちこち悪いが、こいつもあちこち悪い、元氣そうに見えるが、おれもこいつももう歳で、それでお互い散歩なんぞ老老介護もいいところだとぼやいていた。そのSの家の黒犬が、なにかの拍子に逃げ出したのだろうか。このあたりには、ほかに犬を飼っている家はなかった。

だが相変わらぬのんきに鼻先でもってあたりを嗅ぎながら、とことこ近づいてくるそいつは、どうも犬でもないようなのである。大きさは似ているが、明らかに形が違う。わたしはここへ来て、ようやく少し身構えた。これはなにか自分の知らない、野生の生き物かもしれないという可能性にやっと思いつたのである。

わたしは思わず緊張した。しかし黒っぽいその生き物は、警戒心などみじんも見せず、のんきに自分の用事に没頭しながら歩いてくる。道の端には雑草がまだ青々と生えていて、生き物はその草を鼻先でかき分けかき分け、とことここっちへ向かってくる。互いの距離が縮まり、茶色の毛に覆われたずんぐりした体が識別できるようになり、それがタヌキかムジナであるのがわかった。小さな丸っこい耳が顔の上にピンと立っている。とこ

とこ、とことこそいつは短い足を動かしてこっちへやってくる。わたしはもうしばらく前に歩くのをやめて立ち止まっていた。そしてその近づいてくるタヌキかムジナかを見守っていた。

ほどなく、そいつは本格的に草むらから姿を現した。ムジナだ、とわたしは思った。近くで見るとわかるのだが、タヌキとムジナとは、顔つきが微妙に違うのである。タヌキのほうがやや丸っこく、ムジナは少し鼻先がとがって突き出ているのだ。とはいえ、生きている野生のムジナなど見たのは初めてだった。こんな警戒心のないやつなのかと、わたしは驚いた。というのも、わたしまであと数メートルの距離に迫っているのに、ムジナは相変わらぬ鼻先で草むらを嗅ぎまわって、わたしの存在になど少しも注意を払っていなかったからである。

わたしは身動きもせずにじっとムジナを見守っていた。そのムジナは、さらにわたしに近づくとわずかに向きを変え、鼻先を持ち上げてわたしのほうへ歩いてきた。そしてまっすぐにわたしの足めがけてやってくる、そのままふくらはぎのあたりの匂いを嗅ぎはじめたのである。

これはなにやら異様なことであった。野生の生き物が、このように人間に近づくことなどあり得ないといわたしは思っていた。まるで人に飼われている犬のように、そいつはこだわりなくわたしの

ところへやってくる、鼻先でわたしの体を嗅ぎまわっているのである。そいつは体が小さく、おそらく今年生まれた子どもに違いはない。用水路の中を歩いてきたためだろう、脚や腹のあたりの毛がぐっしりと濡れて、黒く湿っていた。足の爪は非常に鋭く長かった。これもまたムジナの特徴である。いまふいにこのムジナが機嫌を損ねて、この爪でもってわたしに襲いかかってきたら、怪我がこわばり、腹の底がひんやりと冷たくなるのを覚えた。なんとも表現しようのない、野生の獣の匂いが鼻先をついた。

そして次の瞬間、ムジナの顔をまともに見下ろして気がついたのであるが、そいつは目が見えないのである。瞳は確かにふたつあって、開いていた。だがその両方ともが、奇妙に青白い光を放って透きとおっており、まるで群青色を溶き入れたガラス玉かなにかのようなのである。

わたしは愕然とした。そいつは鼻先でもって、しばらくわたしの匂いを嗅ぎまわっていたが、やがて「ブヘッ！」というような、子豚が鳴きでもしたような鳴き声を発して、また先へ歩いて行ってしまった。

わたしはしばらくその場に立ち尽くして、呆然としていた。なにやら寒気に似たものを感じながら、わたしはしばらくその場から動けなかった。

自分がいま見たものの意味を、必死に考えようとしている自分があり、その一方で、そんなことをしてなんになるのだと憤っている自分もいた。その憤っている自分は、いま見たもののあまりの明白さに、あえてなにかをつけ加えようとすることを、一種の反逆のようにとらえているのだった。

その自分は、いま見たものに衝撃を受けているわたくしに腹を立てているようだった。なにを驚くことがあるのか、あれはただああした存在であるだけのことで、ただ盲目のムジナというだけのことであって、それは当然あり得ることではないか。なぜおまえはそんなことに衝撃を受けているのか、そしてなぜあわれみだの同情だのといった、くだらない感情を動かそうとするのか？ そんなものはあのムジナにもおまえにもなんの関係もないし、なんの意味もない！

しかしやはりわたしの一部は、確実に衝撃を受けているのだった。わたしはその衝撃を引きずりながら歩き出した。あいつは目が見えない。わたしは考えた。あいつは目が見えない！ そしてあいつがあんなに無邪気にわたしのところへ近づいてきたのは、そのためだったのだ。あいつは目が見えない。だから、目の前にあるものを認識するために、ああやって嗅ぎまわるのだ。だがあんな無邪気さがあり得るのだろうか、野生の中で。あのムジナはわたしを少しも恐れなかった。自分と

同種の生き物でないことは匂いでわかったに違いないが、あのムジナはわたしを少しも恐れず、まっすぐにやってきてわたしの匂いを嗅いだのである。そして例の不愉快そうな「ブヘッ！」をかまして、悠々と立ち去ったのである。

なんとも肝っ玉の据わったというか、豪胆などいうか、あけっぴろげなムジナである。ここまで来ると、わたしはほとんどあきれれていた。このあたりには天敵になるような生き物が少ないためかもしれないが、それにしただってあのお気楽ぶりはどうだろう。そいつは生存にまつわる不安など、少しも感じたことがないとても云いたげに、実際にどつしりと落ちつき払って、ほとんどぶてぶていほどの態度でもって生きていた。盲目という、生存にはおよそ致命的な欠陥を宿していないながら、そいつはその欠点に少しも気がついていないばかりか、周囲の世界を、自分を脅かすものとして認識すらしていないようだった。歩きながら、わたしはあきれ果てた。あんなやつがいるもんか！ わたしは心底あきれかえった。あんな強い、あんな自然な、あんな美しいやつがいるもんか！

そこではたとえ気がついたのだが、なんたることか、はるか前方にもう一匹、最前のようにこちらへ向かってやってくる、毛むくじらのやつがいるのである。わたしはもうあきれ果てて、とうとう笑いだしてしまった。ムジナは家族で行動して

いるというから、定めしあれはさっきのやつのかなにかなのだろう。わたしはかまわずすすた歩いて行った。ムジナのやつも鼻で嗅ぎまわりながら、周囲を気にすることもなくこつちへやってくる。互いの距離が二メートルほどまで近づいたとき、わたしはわざと砂利が敷かれた地面を蹴立てて、ザザッ！ と大きな音を立てた。前方のムジナは驚いて飛び上がり、すぐさま身をかがめ、わたしを威嚇する体勢に入った。

われわれは睨みあった。相手が並ならぬ個体であることは、ひと目でわかった。第一に、このムジナは大きかった。体は丸々として、眼光鋭く、ふさふさと荒々しい毛並みはみごとというほかなかった。いまムジナはその毛先までいっばいに神経をとがらせて、わたしを睨みつけていた。わたしもまた相手を睨んでいた。目をそらしたら負けである。下手に動けば、相手に飛びかかる隙を作ってしまう。これまでこの手の喧嘩など一度もしたことがなかったが、そのムジナとにらみ合いになった刹那、自分の中に眠る太古の掟と本能とが、息を吹き返したようである。こいつメスではないかとわたしは思った。こいつ、さっきのやつ母親ではないかしら？

そのとたん、ムジナが牙をむきだして、わたしに向かつて噛みつくように数度鼻先をつき出した。が、それまでだった。ムジナはくると身を翻し、

用水路の中へ駆け下りていった。試合は終わったのである。相手は無用の喧嘩をするほどバカではなかったし、わたしもムジナと喧嘩をして勝とうなどと考えるほど血のたぎった人種ではなかった。ムジナの走り去った用水路を見ながら、なるほどこれが喧嘩というものかとわたしは思った。悪くないような気がした。熊が相手では、もちろんとても勝ち目はないだろうが、しかし万が一出遭ってしまったときには、どうすればいいのかわかったような気もした。

これが喧嘩か！ 青々と高い空を見上げて、わたしは思った。これがわれわれの現実か！ われわれの生き様か！

わたしは笑い出したいような、奇妙に浮かれた気持ちで散歩の残りを消化しにかかった。こんなに晴れ晴れした気持ちは久しぶりのような気がした。恐怖はどこにもなく、不安の影さえなかった。

わたしはのんびりと残りのコースを消化し、暖かな日差しと澄んだ空気を心ゆくまで堪能した。あの盲目のムジナのこと、ときどき頭にちらついたが、もう少しも感傷的にならなかつた。

あいつは大丈夫だ。おそらく立派に生き抜くだろう。あの巨体の母親、あの並ならぬ母親に育てられた子どもである。その母親は、あの巨体を張って子どもを守り、盲いた子どもに少しも生存の不安を抱かせることなく育て上げることに成功

したのである。まことに見上げた母親であり、まったく並ならぬ母親であった。そしてその母親のもとでのうのうと育ったあのムジナは、死ぬまでそのうのうとした生き様を貫くだろう。最後の息を吐き出す瞬間まで、あのムジナは自分が脅かされているという不安や恐怖とは無縁であるだろう。

いつの間にかわたしは、山にもっとも近づくあたりに来ていた。つまり、うっかり熊に出くわさぬために声を張り上げて歌わねばならぬ時間であった。わたしは大声で歌った。

主や 爾の国に来たらん時

我らを思い給え

心の貧しき者は幸いなり

天国は爾らのものなればなり……

その後、わたしは何度かあの母親のムジナと遭遇した。だがわれわれのあいだには、もうある種の諒解ができあがっていた。わたしがムジナの少し手前で立ち止まると、ムジナはさっと用水路の中へ降りてゆく。そしてそこで、わたしが通り過ぎるまで静かに待つのである。

だがあの盲目のムジナには、その後一度も出遭っていない。秋はムジナの子別れの季節であるという。あのムジナも、大方母親と別れて、どこ

かでうまくやっているのだろう。案外すぐ近くにいて、母親がまだ守ってやっているのかもしれないが、それもあと少しのことだろう。もうすぐ冬が来て、彼らはみな冬眠する。やがて春が来れば、出会いと出産の季節がはじまる。あの立派な母親は、また子どもを産むだろう。そしてまた立派に育てるだろう。わたしは無性に春が待ち遠しいような気がした。そして同時に、すべてのものが雪に閉ざされて眠る冬を夢見ていた。

二〇二三年十一月二十八日

水澤雪下

<https://mjibms.com/>



Mikalojus Konstantinas Ciurlionis : Winter (VII)